メランコリー

カルマ20号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メランコリー

【Ｎコード】

Ｎ２３６９Ｃ

【作者名】

カルマ２０号

【あらすじ】

誰にだってきっとある不安とか孤独とか。私はほんの少し人より寂しがりやなだけ……。

なんでだろう。時々、無性に寂しくなる。
それは私が一人のとき、不意に襲ってくる。
これはもう発作みたいなもので、何をしてようと、私は『一人』じゃなくて『独りぼっち』になる。
私と全ての間に見えない壁があって、何もかもを遮られているような感覚。
あまりの孤独に自分で自分を抱きしめ、その寂しさに自分がかき消されないように爪を立てる。
まるで、私は誰とも繋がってない、今この瞬間誰からも思われていない、そんな現実かもしれない妄想が内側から私を引き裂くように暴走する。
そんな時、私は部屋の隅で膝を抱えて座り、歯をガチガチいわせながら寂しくて悲しい気持ちが過ぎ去っていくのを待つしかない。
でも、本当は別に難しくないのだ、こうなっても治すのは。
例えばタクミを呼び出して、食事にいけばいい。
カナやナギサを招いてピザパーティをしてもいい。
実家に電話すれば免許取りたての弟が車で迎えに来てくれるだろう。久し振りに一家団欒も悪くない。
でも、こんなときに人と会うのは傷つけられそうで。そう思ってることで相手を傷つけそうで。
ひどく怖い。

※

それは、また来た。まだ発作ではないけれど、必ず来るという予兆。

私はアパートの自室で読書中だった。
予防策はなくはない。
携帯を手にとる。片っ端から登録されてるありとあらゆるアドレスにメールを送る。
電話は怖い。出てくれないと不安でたまらないし、ちょっとしたときにできる間がすごく嫌だ。
タクミ、カナ、ナギサ、チカ、ユウヤ、ナツキ、シホ、ダイスケ、サヨコ、――
よくメールする仲の人には送り尽くした。でも、まだ足りない。
しばらくあってない友人も、昔の彼氏も、喧嘩中のサークル仲間も、生意気な後輩にも。
こんにちは、元気？　今度会おう、――
内容なんてどうだっていい。ただとりあえず送って、そのうち何通か返信が来て、しばらくやりとりができればいい。
とりあえず、返信が来るまでは耐えなきゃいけない。
部屋を見渡す。
凄く汚い。
気付けば、掃除を始めていた。
部屋に散らかっている雑誌や空き缶をまとめてゴミ袋に投げ込む。ついでに机の上に堆積している、いる物もいらない物も投げ込む。
財布に収まりきらないレシート、スーパーの袋、使ってない灰皿、お菓子の空き箱、全部、目に付くもの全部をゴミ袋に投げ入れる。
少しだけ思い出のあるものや、なんとなく捨てられないもの、これからさききっと必要になるものまで放り込む。
いつのまにか市指定のゴミ袋二つ分もの量になっていた。
とりあえず表面のゴミは消えたので、次は丹念に埃をとる。
照明の笠、棚の上、パソコンの裏、びっくりするくらい埃が溜まっていて、顔をしかめる。
雑巾で家具や床の隅々まで磨く。キュッキュッと小気味いい音が狭い室内に響く。

でもその音が部屋中に響くほど、無音なのが少し不安でもある。
だから、その考えを振り払うかのように作業に集中した。
なんだか無性に掃除をやりたくなる時ってある。

※

あらかた掃除をやり尽くして手持ち無沙汰になる。
携帯に返信は、まだない。
部屋をウロウロする。
テレビをつけたり、消したり。
ベッドに飛び込んでゴロゴロ。
音もなく、けど確かに近づいてくる孤独にいつ囚われるかわからない不安で私はイライラしていた。
ただそれだけでボロボロだった。
キッチンでコップ一杯のミネラルウォーターを飲む。
ついでに冷蔵庫を覗く。
とりあえず一番下の野菜室。
ガランとした中、隅っこに細長いもの。
ねぎ。長ねぎだった。
なぜだか惹かれるように私はそれを手にとり、まじまじと眺めた。
青々とした上部から突然、病的なまでに白くなってる長ねぎ。いい長ねぎだ。
だから刻んだ。
とりあえず刻んどいた。
私はアレルギーのせいか、長ねぎを刻むだけで泣ける。ぴぃぴぃ泣いた。ねぎを刻みながら、嗚咽としゃっくりでぼろぼろになって、涙で顔がぐちゃぐちゃになった。
それでもねぎを刻んだ。

残ったのは刻みねぎの山。

※

ねぎの山をどうしようか、と私は悩んだが時計を見て、いい時間だと気付いた。

そのまま食事の準備をしようと冷蔵庫や棚を漁る。

ご飯は夕べ、冷凍したのが残ってるはずだ。

あとはおかずと味噌汁が欲しい。

冷蔵庫の片隅から豚肉を見つけた。

さて、どう料理しようか。しばし思案。

まぁ、焼くのが無難だろう、という結論に辿り着くのに五秒。決めたらさっさと用意をする。

さっき刻んだねぎのうち、半分をさらに微塵切りにする。右手で柄を持ち、左手で包丁の背を押すようにして、上下左右ありとあらゆる方向から滅多切りにした。

いい感じに原型を留めなくなったねぎに、今度は適当に塩を振りかけ、揉む。

揉み、揉み、揉み――

ねぎから水分が染み出し、さらにぐちょぐちょになる。

それを豚肉と一緒にタッパーにぶち込み、レモン汁、胡椒で味を調える。

味を染み込ませるため、しばらく放置する。その間に味噌汁をつくろう。

あらかじめ、鍋に水を入れて強火で沸騰させておく。

シンク下のスペースから煮干を引っ張り出す。

まな板の上に広げ、一匹、一匹、頭と体を手で千切る。

頭のない煮干を鍋に放り込んで、しばらくすると出汁のいい香りがして来た。

頃合いを見計らって、煮干を取り出す。それを生ゴミ入れに捨て

る。
まな板の上に転がってる、煮干の頭が恨めしそうに私を見ていた。
なんか、笑える。
残りのねぎを鍋に入れ、煮えるのを待つ。
冷蔵庫から赤味噌を取り出し、お玉に適量のせる。お玉ごと鍋に突っ込み、菜箸で味噌を溶く。
味噌汁のいい香りが、キッチンから部屋中を包む。
なんでだろう、部活から帰るとお母さんが夕飯の準備をしてる、そんな光景が浮かび上がってきて、懐かしいような、切ないような気分になる。
味噌汁にはそんな力がある。

※

豚肉をよく焼いて皿に盛り、ご飯を解凍して、お椀に味噌汁をよそる。
小さなテーブルに運んで、食事の準備終了。
頂きます、と呟いて箸をつけようとした瞬間、携帯からけたたましい音が響いた。
ディスプレイを見ると新着メールが何件も届いている。
正直、すっかり忘れていた自分がおかしくて笑った。
表示される無機質な文字の群れ。ほんの些細な言葉。それを打つみんなの表情。
私は独りじゃない、ディスプレイに映るみんなからのメールや着信履歴を見て、強く実感できた。
ただそれだけで私を捉えようとしていた不安はどこかに消えてしまった。
一件、一件、返信を打つ。メールじゃ伝わらないだろうけど、感謝の気持ちをしっかり込めて。

全部、打ち終わった頃には味噌汁はすっかり冷めていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2369c/

メランコリー

2010年10月17日02時19分発行